

黒澤明『生きる』における「ゴンドラの唄」

伊 達 立 晶

序

黒澤明（一九一〇—一九八八年）の監督映画『生きる』（脚本・黒澤明、橋本忍、小国英雄、一九五二年）では、胃痛に冒され余命幾ばくもないことを悟った主人公・渡辺勘治が「ゴンドラの唄」を涙ながらに口ずさむ場面がある（シーン六七）⁽¹⁾。「生命短かし」、「明日という日の 無いものを」⁽²⁾といった歌詞は、死に直面した渡辺の絶望を端的に表している。しかし作品の終わり近くでブランコに乗った渡辺が同じ歌を歌う場面（シーン一三九）では、渡辺は悲嘆に暮れるどころか上機嫌でさえある。それは渡辺が為すべき仕事を達成した直後でもあるので、たしかに上機嫌であること自体は不自然を感じさせないかもしれない。しかしそうであったとしても、一度は絶望とともに歌われた歌が、なぜここでも歌われるのだろうか。むしろ歌を口ずさむならこのような不吉な歌ではなく、別の歌を口ずさむほうが自然ではないだろうか。

このブランコの場面に関して、たとえば映画評論家の吉村英夫は、西行の「ねがはくは花の下にて春死なむそのきさらぎの望月の頃」という歌を引き合いに出し、「ある意味、渡辺勘治は、なすべきことをなし、みるべきものをみての上での死であり、西行の最期とつながるものがあつたと言つてよいのではないか。（中略）西行も渡辺も『ねがはくは』

の状態に死を受け入れていったのだろう」と述べている⁽³⁾。この考え方を敷衍するならば、いわば渡辺は従容と死を受け入れていったということになろう。しかし人はそこまで達観できるものだろうか。なおも不自然な感は否めないように思われる⁽⁴⁾。

本稿ではこの問題を検討するために、以下の手順をとる。まず第一章では、『生きる』のあらすじを紹介する。第二章では、『ゴンドラの唄』がもともとどのような歌であったのか、また映画の中でどのように用いられているのかを確認する。そして第三章では作品の仕掛けを読み解きつつ、映画の中で二度歌われるこの歌の歌詞の解釈が変化している可能性について論じる。以上の考察を経て、ブランコの場面では「ゴンドラの唄」が死の悲しみを意味していないことを明らかにしたい。

一 『生きる』のあらすじ

まず作品のあらすじを紹介しておこう。

主人公の渡辺勤治は、市役所の市民課の課長を務める初老の男である。三〇年間におよぶ事務仕事に従事するうちに仕事への情熱を失った渡辺は、仕事に本腰を入れることがなく、ナレーションでも「彼は生きているとは言えない」と紹介されている(シーン三)。市役所の効率の悪い仕事ぶりは、不潔な下水溜まりを公園に変えてほしいという陳情が、まず渡辺のいる市民課から土木課に回され、その後も地区保健所、衛生課などへとたらい回しにされ、結局もとの市民課に戻って来るといふ喜劇的な描写で紹介されている。渡辺らはこうした職場で無為に生活しているのである。

ところが病院の待合室で偶然会った男から胃癌の症状を聞かされ、それがすべて自分の身に覚えがあることを自覚した渡辺は、自分が間もなく死ぬ運命にあることを知る。息子夫婦や兄夫婦とも心の交流を失っている渡辺は、誰にも自

分の病気について言えずに、市役所を欠勤するようになる。飲み屋で出会った小説家に病状を告白すると、街で遊ぶことを知らずに生きてきた渡辺のこうした境遇に興味をもった小説家は、渡辺を夜の街に案内し、パチンコ屋、ピヤホルなどで人生の楽しみを味あわせてやろうとする。だが心から楽しむことのできない渡辺は、カフェーの楽師に「ゴンドラの唄」をリクエストし、自ら歌いながら泣くのである。

幻滅とともに夜遊びを終え、小説家と別れた渡辺は、部下の小田切とよと街でばったりと出くわす。元気で活発な彼女はもともと退屈な市役所生活にうんざりしており、玩具工場に転職しようとしていたのだが、辞表に渡辺の押印が必要なので困っていたという。押印のために小田切を連れて自宅に帰る渡辺は、この女のせいで欠勤し朝帰りするようになったのだと息子夫婦に誤解されることにもなるが、そうしたことは気もかけずに小田切と意気投合し、パチンコ屋やアイス・スケート場などをめぐることになる。若い小田切に惹かれ、彼女とともにいることに楽しさを見出す渡辺であるが、しかし数日間続くこのような遊興生活に小田切は嫌気がさし、こういう生活はやめようと切り出す。そこで渡辺は、病氣のことを告白し、どのようにすれば君のように生き甲斐をもって生きることができると問う。小田切は玩具工場で玩具を作るだけでも子供と仲良くなったように思えると述べ、渡辺に何か作ってみればよいのではないかと提案する。その言葉に渡辺は、不潔な下水溜まりを公園に変えてほしいという陳情のことを思い出し、小田切が見せた兎の玩具を引っ掴んでその場を去る。いわばこの瞬間から渡辺は「生き」始めるのである。

場面は一転し、渡辺の遺影がクローズアップされ、五ヵ月後の渡辺の通夜が舞台となる。臨席した市役所の人々の会話を通じて、渡辺の粘り強い説得で助役をはじめ土木部や公園課などがようやく動く、公園が造成されたことから、それらの完成した公園で渡辺が死んだことなどが明らかにされる。それぞれの課の仕事で公園が完成したことから、それらを統括する助役は自分が功労者だと自認しているが、本当の功労者が渡辺であることは薄々誰もが認めており、特に市役所に陳情した住民たちは助役たちを無視して渡辺の遺影の前で泣く。きまり悪くなった助役たちが住民たちに続いて

退席すると、渡辺の部下たちは、本当に渡辺が功労者なのか、なぜ渡辺が急に熱心に働き始めたのか、議論し始める。そして渡辺が各課に粘り強く交渉し、地権にからんで脅しをかけて来るヤクザにも屈しなかったエピソードなどが話題になる。やがて渡辺が繰り返し自分には「暇はない」と口にしてきたことに人々は気づき、渡辺が自らの死期を悟って仕事に打ち込むようになったのだと、皆、納得する。その直後に、死ぬ直前の渡辺を見かけた警官が焼香に現われ、渡辺が楽しそうに公園でブランコに乗っていたことが報告される。心打たれた職員たちは、渡辺のあとに続いて自分たちもがんばろうと口々に誓うが、次の日からまた無気力な仕事ぶりに戻ってしまう。映画は完成した公園で嬉々として遊ぶ子供たちを映して終結する。

二 「ゴンドラの唄」の使い方

この映画のなかで「ゴンドラの唄」は四回扱われている。オープニングとエンディングで流れる際には歌詞が付かず、映画全体の主題曲として提示されていると考えてよいだろう。あとの二回は、渡辺自身が歌っている。この二回について、より詳しく見てみよう。

カフェーの場面（シーン六七）では、リクエストを求める楽師に向かって渡辺自身がこの曲をリクエストし、楽師は「ああ、大正時代のラヴ・ソングですな、O・K」と答えて明るくピアノを弾き始める。そしてその伴奏に合わせて店にいた若い男女が腕を取り合い、踊り始めるのだが、陰鬱な渡辺の歌声に恋人たちも興醒めし、踊りをやめてしまうのである。

楽師の言うように、この「ゴンドラの唄」はもともと「ラヴ・ソング」だった。吉井勇作詞、中山晋平作曲の歌で、大正四年（一九一五）の作品である⁽⁵⁾。四番まである歌詞を見てみよう⁽⁶⁾。

一

いのち短し、戀せよ、少女、
朱き唇、褪せぬ間に、
熱き血液の、冷えぬ間に、
明日の月日のないものを。

二

いのち短し、戀せよ、少女、
いざ手を取りて彼の舟に、
いざ燃ゆる頬を君が頬に、
ここには誰も來ぬものを。

三

いのち短し、戀せよ、少女、
波にたゞよひ波の様に、
君が柔手を我が肩に、
ここには人目ないものを。

四

いのち短し、戀せよ、少女、
黒髪の色褪せぬ間に、
心のほほ消えぬ間に、
今日はふた、び來ぬものを。

一読してわかるように、これは「舟」（ゴンドラ）に乗る男が女を誘惑する歌である。「いのち短し」という歌詞も、「人生や若い時期は短いだから、恥じらったり躊躇したりしないで誘惑に応えてほしい」というニュアンスを伝えることばである。

しかしこの歌を歌う渡辺は、二番と三番の歌詞を省略し、一番と四番のみを歌っている。そうすることによって直接的に女性を誘惑する意味合いは欠落し、命の短さを嘆くニュアンスが強調されるのである。元の歌が明るいために、いっそう渡辺の歌の暗さは虚をつくような印象を与えている。

これに対しブランコの場面（シーン一三九）では、目撃した警官の「あんまり…楽しそうだったから…なんと…言っている…：その…シミジミと…歌を唄っておられたんです…そりゃ…その不思議なほど…心の奥のほうまでシミ渡る声で…」という言葉通り、渡辺は弱々しくも楽しそうにブランコを漕ぎながら「ゴンドラの唄」を歌っている。カフェーの場面とはまったく異なる印象を与える描写だといえよう。

三 作品の構成から見たブランコの場面の意味

通夜の席における議論の過程で渡辺の行動の意味が明らかになっていくので、その場面は臨席者にとっては一つの謎解きのような様相を呈している。そして警官の証言を聞き、死期を悟りつつ超然としていた渡辺に、臨席者は驚き心打たれるのである。特にこのブランコの場面の直前（シーン一三八）では、渡辺の「功績を横取り」した助役が批判され、「あの…公園で一人で寂しく死んで行く時の…渡辺さんの気持…どんなだったろう…僕ア…考えただけで…」と渡辺の部下が悔しがっている。実際渡辺の努力は公には認められず、開園式でも渡辺が隅の席に座らされていたということもすでに示唆されており（シーン一〇）、公園における渡辺の死が「市の上層部に対する無言の抗議」ではないか

と勤める新聞記者の姿も描かれている（シーン一一〇）。そのためいつそう「楽しそう」にブランコに乗っていたという渡辺に、部下たちが一種の気高さを覚えたとしても無理はないのである。

通夜の臨席者たちに感情移入して漫然と映画の進行を追うならば、われわれ鑑賞者もまた、渡辺の大悟した有り様をブランコの場面に認めるかもしれない。だが彼らには実際には渡辺の一面しか見ておらず、死の絶望に煩悶する渡辺の姿を見ていない。したがって、彼らに共感して回心後の渡辺を理解したつもりになるのは早計であろう。むしろわれわれは、通夜の臨席者と同様の感慨にふけるのではなく、彼らの理解の及ばぬ次元で渡辺を理解しようとすべきではないだろうか。

渡辺がいかに救いを見出していくのかということが作品の軸であるとすれば、渡辺の苦しみを知り、それを気遣う二人の人物に注目することができよう。一人は、飲み屋で出会った小説家である。彼はその際「私はね、今夜、貴方のためによるこんでメフィストフェレスの役をつとめますよ」と述べており（シーン六一）、ト書きにも示されているように⁽⁷⁾、その外見もメフィストフェレス的な風貌をしている。つまりメフィストフェレスがファウストを酒場や魔女の厨に連れて行ったように、小説家は渡辺を夜の街に連れ出すわけである。ゲーテの『ファウスト』第一部（一八〇八年）では、人生に絶望したファウストがメフィストフェレスと出会う以前に毒を仰ごうとしていたが（六八六―七三六）、『生きる』でも渡辺はこの小説家と知り合う前から、酒が胃腸患者にとつて毒だと知りつつ、「一思いに死んでやれ」という気もちで酒を飲んでいる（シーン六一）。またこの二人の足もとに黒い犬がうろついていることも、『ファウスト』第一部で黒い尨犬がメフィストフェレスに変身すること（二二四七―二三三三）と対応している⁽⁸⁾。

『ファウスト』と『生きる』との類似性は他にもある。まず日々の労働の大切さというテーマ自体が、共通しているといえよう。ファウスト自身、死ぬ直前に「さうだ、俺の歸依してゐる意趣は、／知識の最後の歸結で、其はかうだ／『自由と生活とは、日日之を獲得する者にして、／始めて之を味ふ権利あり。』（一一五七三―一一五七六）と悟り、フ

アウストの魂を迎える天使たちも「誰にもあれ、たえず努力する者は、／我等これを救ふことを得」（一九三六—一九三七）と述べている。しかもファウストがこのように悟った際に従事していた仕事は、多くの人を動かして毒気のある沼沢地の水を抜き、土地を干拓する事業であり⁽⁹⁾、臭くて皮膚炎を起こす下水溜まりを公園にする渡辺の事業と類似している⁽¹⁰⁾。このように考えるなら、『生きる』は主題においてもゲーテの『ファウスト』をふまえているのだといえよう⁽¹¹⁾。

だがメフィストフェレスがファウストの救いにはならなかったように、この小説家も渡辺の憂鬱を晴らすことができない。死の悲しみは、刹那的な快楽では癒すことができないのである。むしろ実際に渡辺に生きる道を指し示したのは、渡辺の苦しみを知るもう一人の人物・小田切である。市役所を退職し玩具工場で働くことになるこの若い女性が、最終的に渡辺を回心させ、彼女のおかげで渡辺は生の充実と喜びを味わうことができたのである。渡辺の病状や心境を知る登場人物が（病院の待合室で会った男、医者たち、スタンド・バアのマダム⁽¹²⁾のように、ほんの短い間しか登場しない人物以外には）小説家と小田切だけであり、それぞれの仕方でも渡辺を慰めようとしたことをふまえるならば、作品構成として小説家と小田切とが対になっていることは明らかである。したがって小説家がメフィストフェレスに相当するとすれば、小田切はグレートヒエンに相当するといえよう。『ファウスト』第二部（一八三三年）の末尾では、グレートヒエンの霊が聖母マリアとともにファウストの魂を天上へと導き、「久遠の女性は／我等を曳き行く」（二二一一〇—二二一一一）と結ばれているのだ。そうであれば、死の直前のブランコの場面は、小田切との関係から理解されるべきではないだろうか。つまり渡辺が心楽しくブランコを漕いでいたのは、小田切の面影を回想していたからではないだろうか。

そもそもこの公園の造成に渡辺を衝き動かしたのは、工場で作っている鬼の玩具を見せながら「こんなもんでも、つくつてると楽しいわよ。私、これつくり出してから日本中の赤ン坊と仲良しになったような気がするの」、「ね、課長さ

んもなにかつくって見たら……」といった小田切の言葉だった（シーン一〇二）。その言葉をきっかけに、渡辺は子供のために公園を作ってほしいという陳情（シーン三）を思い出し、自分にもまだできることがあると自らを奮い立たせたのだった。そうであればブランコの上で渡辺は、小田切の言葉の意味を実感することもできたであろう。完成しつつある公園を見ている際も、その場には子供がいなのに「ちようど、眼に入れても痛くない……自分の子供か孫を見るような」様子であったと公園課代表は証言しているし（シーン一三二）、『生きる』のラストシーン（シーン一四四）では、嬉々としてそのブランコを漕ぐ子供たちが映されており、渡辺と子供たちとの繋がりが示唆されている。つまり渡辺は小田切と同様、直接的には子供と接しているわけではないが、子供のためのものを作ることによって子供と繋がっているような気もちを共有しているのである。活気のある小田切に憧れ、シーン一〇二の喫茶店で彼女に「一日でもよい……そんな風に……生きて……その……生きて死にたい」と訴えていた渡辺は、ブランコ上でしみじみと小田切の生きる喜びに共感することができたのではないだろうか。

またブランコに乗る渡辺が「楽しそうだった」と語る警官の証言も、一考に値する。この言葉は「こんなもんでも、つくつてると楽しいわよ」という小田切の言葉と対応するのみならず、渡辺が「楽しい」と述べるのは、いつも小田切と共にいるときなのである。すなわち小田切と初めて街中に繰り出した後の小料理屋の場面（シーン九六）で、渡辺は「今日は……実に……楽しく……」と述懐しているし、渡辺と小田切とが最後に会った喫茶店の場面（シーン一〇二）でも、なぜ自分を追い回すのかという小田切の問いに対し、渡辺は「わしは……君と……こうやってると……楽しいから……」と答えている。渡辺に関して「楽しい」という言葉が用いられるのは、これらの場面と警官の証言だけなのである。そもそも無為な生活から抜け出そうとする渡辺に向かって、小説家は「人生を楽しむことってね、これは貴方人間の義務ですよ」と語りかけ（シーン六一）、そこから渡辺の楽しさへの追求は始まっていた。結局のところ、小説家とともに回った夜の街では渡辺は「楽しい」とは口にせず、実際あまり楽しんでいないようにも見えないが、小田切と一緒にいること

は「楽しい」のである。ブランコの上で「楽しそう」に歌う渡辺が、小田切のことを懐かしく思い出していることは十分に考えられるのではないだろうか。

たしかに「もしここで渡辺が小田切を回想しているならば、彼女の映像を回想シーンとして挿入するはずだ」という反論もあるかもしれない。だがブランコの場面自体が警官の回想シーンであるため、そこに登場する渡辺のさらなる回想シーンを挿入することは不自然になろう。小田切との関係を回想することのできる渡辺自身が死んでしまった後、そうした形で小田切の存在を示すことはできないのである。

しかし小田切との関わりは、ブランコの場面以後の短い時間の中で、二つの仕掛けによって明瞭に示唆されている。一つは、渡辺の妾が通夜に來ないことを不審に思う渡辺の兄・喜一が存在である。喜一は欠勤した弟の金遣いの荒さから、弟に女ができたかと疑っており（シーン五九）、渡辺の息子から小田切の存在を知らされていたので（シーン九八）、弟に女がいたと確信していたのだが（シーン一一）、しかしその喜一も、渡辺が死期を悟って仕事に打ち込んだことを知り、「あれ…本当にそうだったのかな？」と初めてその考えに疑念を抱くようになる（図一…シーン一四一）。鑑賞者はすでに小田切が渡辺の女ではないことを知っているのだから、ある意味でこうした描写はクライマックスの感傷を損ねるものといえる。しかしあえてここでその話が出されるのは、シーン一〇二以降登場しない小田切の存在を鑑賞者に思い出させるためではないだろうか。

さらにその喜一の台詞の直後、カメラは渡辺の勤続二五年を讃える表彰状や目覚まし時計の前面に、小田切から受け取った兎の玩具を大写しでとらえている（図二…シーン一四一）。これもまた小田切のことを回想させる仕掛けと考えて良いだろう。じつはこれらの小道具は、すでに渡辺の息子夫婦や喜一が会話している場面から中央上方に映り込んでおり、目立つように兎の玩具に光が当てられているのだが（図一…シーン一四一）、それに気づく人は少ないかもしれない。そのためその直後にこうしたショットを挟み込むことで、これらの小道具の重要性がことさらに強調されている

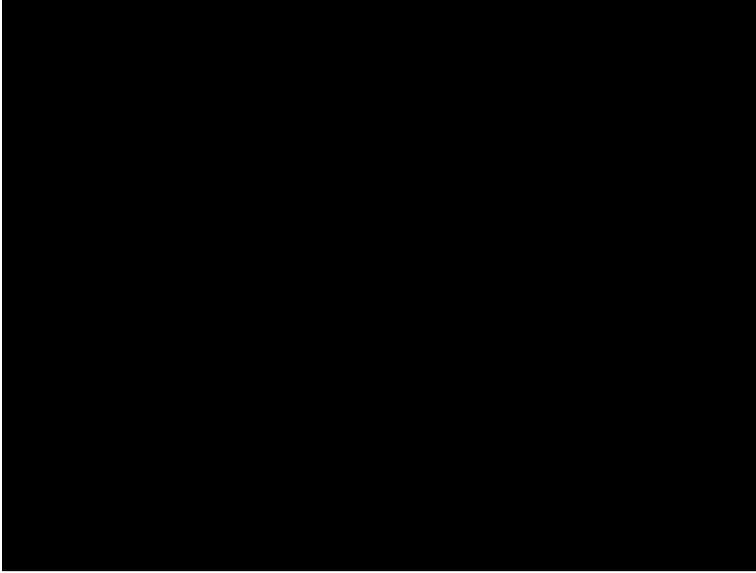


図1 シーン 141 より

に襲われ、布団に潜り込んで泣く渡辺が映された後、その渡辺の頭上に飾られた表彰状が大写して映されるのである¹⁴⁾。シーン一九で語られているようにあと一カ月で三〇年間の無欠勤記録を作ることができたはずの渡辺は、この日から無断欠勤をし始め、機械的な日常生活にピリオドを打つことになる。いわば目覚まし時計と表彰状は、ただ惰性で過ごしてきた時の長さを示す小道具になっていると考えられよう¹⁵⁾。それゆえシーン一四一で兎の玩具が表彰状や目覚まし時計の前面に置かれる際、小田切から受け取ったその玩具は、無為な生活を一変させたきっかけとして強調されていると考えられる。脚本には「廊下の片隅に、通



図2 シーン 141 より

のである¹³⁾。この目覚まし時計と表彰状は、胃癌であることを知った夜、渡辺が床につく場面(シーン五四)ですでに一度映されている。ここでは、いつもの習慣で目覚まし時計のネジを巻いているうちに悲しみを

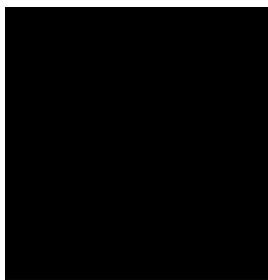


図3 『生きる』のスチール写真の一つ

夜の席をこしらえるために、渡辺の部屋から運び出した、もろもろのガラクタ道具が積上げてある。その中から、ゴミに半分埋もれながら顔を出している兎の玩具」というト書きが付けられており¹⁰⁾、故人の勤続二五年を表彰した賞状までもが、遺族にとつて「ガラクタ道具」ないし「ゴミ」として扱われていることが示されている。そこに兎の玩具もまとめられているわけである。ここでは、遺族や部下たちには知られるはずもない渡辺と小田切との関係が示唆されていると考えるべきだろう。渡辺亡き後、回想シーンとして小田切が現われることはなく、表面的には小田切の存在が忘れられているように見えながら、その存在の大きさは周到に表現されているのである。

さらに注目すべきことに、この映画には、渡辺の左のブランコに小田切が乗っている情景をとらえたスチール写真が複数枚ある（そのうちの一枚が図3）。この映画の制作宣伝を担当した道江達夫は「黒澤明は一枚のスチール、一片のポスターと雖も自分の作品の一部と考えている」と述べており、実際の映画では映されないこの情景も黒澤自身の意図に基づいていることを明らかにしている¹¹⁾。親密な時期には常に小田切が渡辺の左に連れ添っていたことをも考慮するならば、無人の左のブランコに小田切の存在が想定されていた可能性も考えられるだろう。

そう考えるならば、ブランコの上で渡辺が歌う「ゴンドラの唄」は、新たな意味をもつことになる。すなわちカフエーで涙ながらに歌われる「ゴンドラの唄」において強調されたのが「生命短かし」や「明日という日の 無いものを」であったのに対し、ブランコの上で歌われる「ゴンドラの唄」においては、「乙女」が強調されていると理解されるべきだろう。つまりここでは、「乙女」の若い生を寿ぐという、「ゴンドラの唄」が本来もっていた内容が取り戻されているのではないだろうか。

この場合も歌われるのは一番のみで、「乙女」を直接誘惑するような意味合いはない。むしろ渡辺は、若い小田切がこれから経験するであろう恋愛を思い、もはや

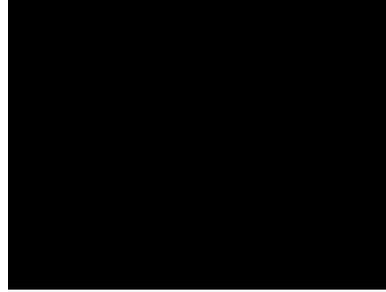


図4 シーン 102 より

会うこともない小田切の幸せを願って、誰か似合いの青年に「恋せよ」と口ずさんでいるのではないだろうか。小田切が誰かに恋をしているような素振りには作品中でまったく示されておらず、渡辺と小田切とが最後に会った喫茶店では、寄り添い合う恋人たちを前景に配置し、それを中景から小田切が見ている情景も映されている(図4…シーン一〇二)。後景でも若い男女が楽しげに語りあっており、その間に挟まれた小田切は、なぜこんな老人につきあわなければいけないのかと、終始不機嫌である。その場面で「わしは…君と…こうやってると…楽しいから…」と語る渡辺に対し、小田切は「老いらくの恋?…だったらお断りよ」と、渡辺自身との恋愛関係を拒絶している⁽⁸⁾。これらの伏線をふまえてブランコの場面で「ゴンドラの唄」が歌われ、同じ歌詞のままに意味合いを変えて、いわゆる「老いらくの恋」ではない渡辺の深い愛情が示されるのである。渡辺が死の間際に楽しげに「ゴンドラの唄」を歌う姿は、こうした小田切との関係から理解されるべきである。

結

以上の考察をまとめよう。『生きる』のブランコの場面において、なぜここで渡辺が「ゴンドラの唄」を楽しげに歌えるのか、これまでに十分には検討されてはこなかった。一度は涙ながらに歌われ、命のはかなさが印象づけられる歌でもあるだけに、公園造りが成功した満足感だけでは、その理由の説明として十分ではあるまい。むしろその理由は、渡辺が小田切を回想していることに求められるべきだろう。この場面で歌われる「ゴンドラの唄」は、死の悲しみを意味するものではなく、生きることを自分に教えてくれた小田切への愛情に満ちたメッセージだと考えるべきである。

- (1) 註
台詞の表記とシーンの数は『全集黒澤明 第三巻』岩波書店、一九八八年、一四七—二〇一頁所収の脚本を参照する。ただし脚本と実際の台詞とが異なる場合は、脚本の表記を参照しつつ台詞のほうを記述する。
- (2) 脚本のシーン六七では「生命短かし 恋せよ乙女」以降の歌詞が省略されているので、シーン一三九の表記を参照した。もとの歌の歌詞は「明日の月日のないものを」である（本稿第二章参照）。
- (3) 『吉村英夫講義録 黒澤明を観る 民の論理とスーパーマン』草の根出版会、二〇〇八年、一六八頁。
そもそも西行は、渡辺のように死期を悟っていたわけではないからこそ「どうせ死ぬなら釈迦の命日頃に死にたい」という希望を詠むことができたのである。適切な比較であるとは考えがたい。
- (4) この歌は、ツルゲーネフの長編小説『その前夜』を脚色した同名の劇の劇中歌として作られた。歌詞は森鷗外訳のアンデルセン『即興詩人』『妄想』の章で歌われるヴェネツィアの舟歌をもとにしたものである。詳細は、相沢直樹『甦る「ゴンドラの唄」』新曜社、二〇一二年参照。
- (5) 表記は、相沢直樹『「ゴンドラの唄」考』、『山形大学紀要（人文科学）』第一六巻三号、二〇〇八年、一—三一頁（一一八—八八頁）の四頁（一一五頁）に挙げられた「楠山脚本」に従う。
- (6) 前掲『全集黒澤明 第三巻』一六四頁。
- (7) 『生きる』に用いられた底本は定かではないが、本稿ではその映画の四年前に出版された櫻井政隆訳の『全譯ファウスト』、大東出版社、昭和三年を用い、適宜行数を示す。
- (8) ファウストは次のように語っている。「あの山に沿うた處に沼があつて、／これまで開墾した所に毒瓦斯をかける。／あの腐れ水の流れ口をつけるのが、／最後の仕事であり、最高の仕事でもある」（一一五五九—一五六二）。
- (9) 市民課の窓口で、おかみさんたちは口々に次のように述べている。「ウチの子供なんか皮膚が弱いもんですからね、その水にかぶれて身体中変なブツブツが出来たんですよ」、「それにねえ、蚊の多いったら」、「第一、臭くってねえ」、「なんとかならないんですかねえ、あすこ埋立てれば立派な子供の遊び場が出来ると思うんだけど……」（シーン三）。ただし共同脚本を書いていた小国英雄に相談された友人が、東京市役所の公園課予算主任だった体験をふまえ、主人公が沼地を埋めて公園を作る役所の職員とする設定を提言したという証言もある（阿部嘉典『映画を愛した二人』黒澤明 三船敏郎 報知新聞社、一九九六年、七八—七九頁）。また映画製作中に発表されたシナリオ（『映画ファン』一九五二年四月号）では、小説家も登場しないという

- (17) (16) (15) (14) (13) (12) (11)
- (都築政昭『黒澤明と「生きる」―ドキュメント・心に響く人間の尊厳』朝日ソノラマ、二〇〇三年、八二―八五頁)。したがって、その沼地が有害であることなどの『ファウスト』のモチーフは、その初期構想の後に設定されたと考えるべきだろう。
- 西洋文学の枠組みを用いることは、黒澤映画に珍しくはない。『白痴』（一九五一年、原作はドストエフスキーの『白痴』）、『蜘蛛巣城』（一九五七年、原作はシェイクスピアの『マクベス』）、『乱』（一九八五年、原作はシェイクスピアの『リア王』）が、その例として挙げられよう。『生きる』の脚本執筆に携わった小国英雄は、一年しか生きられない男の話を作ろうという黒澤の構想を聞かされ、トルストイの『イワン・イリッチの死』を連想したというが（『黒澤明を語る人々』黒澤明研究会編、朝日ソノラマ、二〇〇四年、三六頁）、それだけに還元できるわけではないだろう。
- 小説家がマダムに向かって「この人は胃癌という十字架を背負ったキリストだ」と告げるのである（シーン六五）。この台詞は、渡辺が医者言葉によって自らの胃癌のことを知る瞬間、渡辺の背に窓の棧の影が十字形によぎる照明と対応しているだろう（シーン二二）。その背後の医師などに影が落ちないことから、この照明が意図的であることは明白である。
- ここでは警官が届けてくれた渡辺の帽子も息子の手にあり、この映画の重要な小道具が画面中央縦一列に集結している。前掲『甦る「ゴンドラの唄」』にも指摘があるように（二二七―二二八頁）、この派手な帽子は、夜の街で帽子を失った渡辺が「貴方の古い頭を切換えるためにもね、新しい帽子を買った方がいいです」という小説家の助言に従って買ったもので（シーン六四）、以後、渡辺はこの帽子をかぶり続けるのである。
- このシーン五四では、懐中時計と目覚まし時計をセットしているが、映画冒頭のシーン二ではその懐中時計を仕事中に渡辺が見ており、続くシーン三で再び懐中時計を見た直後、「彼は時間をつぶしているだけだから：彼には生きた時間がない」というナレーションがかぶせられる。
- シーン七七では、この表彰状を見た小田切が「あんなところで三十年：私、考えただけで死にそうだわ」と述べ、渡辺も、「近頃、わしは：あれを見る度に：何時か、君が読んだ笑い話をその：いやいや：あれは：その：全く：本当だ」と答えている。渡辺が思い出す「笑い話」とは、シーン三で小田切が市民課の人々の前で読み上げたもので、「君、一度も休暇をとらないんだってね“うん”君がいないと、役所が困るってわけか”いや、ほくがなくても、役所では全然困らんということがわかつちやうと、困るんでね”というものである。
- 前掲『全集黒澤明 第三巻』一九九頁。
- 道江達夫『昭和芸能秘録―東宝宣伝マンの歩んだ道』中公文庫、二〇〇一年、一七二頁。

(18) この映画で「恋」という言葉が用いられるのは、この小田切の台詞と「ゴンドラの唄」の歌詞のみである。